

竹
服の表現論から始める加群論

サクラマス

お品の書

1. 籠とは何か？ 抑も表現とは

2. 籠の表現と多元環の表現

~~3. Auslander-Reiten 理論 (次回)~~

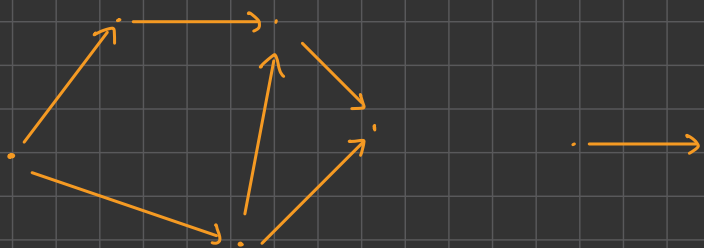
箴とは何か？ 抑も表現とは

君は箴 (quiver) を知ってるか？

箭とは何か？ 抑も表現とは

君は箭 (quiver) を知ってるか？

有向グラフのこと

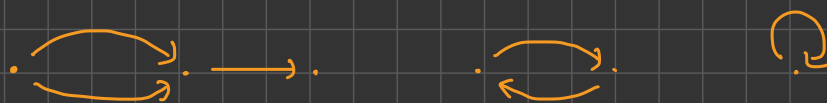
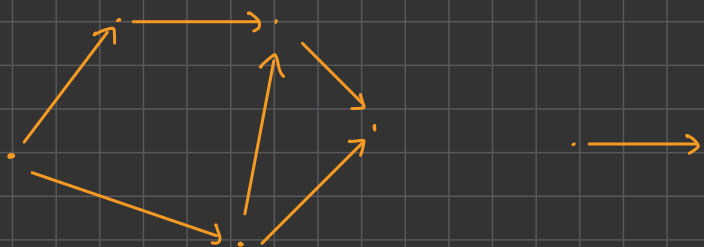


箭とは何か？ 抑も表現とは

君は箭 (quiver) を知ってるか？

有向グラフのこと

(多重辺 ok)
(ループ ok)

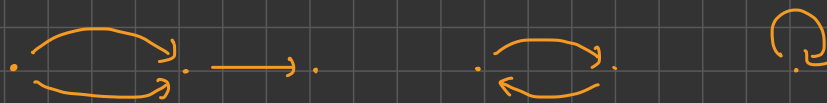


箭とは何か？ 抑も表現とは

定義 $Q = \langle \text{ob} Q, \text{mor} Q, \text{dom}, \text{cod} \rangle$ が箭であるとは,
 dom, cod が $\text{mor} Q \rightarrow \text{ob} Q$ なる写像であることとする。

注意 辺 $e \in \text{mor} Q$ に対し, $\text{dom}(e)$ を e の始点, $\text{cod}(e)$ を e の終点, とする。

• $\text{ob} Q, \text{mor} Q$ は有限集合とすることが多い。



籠とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？

スロ - か2 「数学的対象 X の表現とは, X からの関手 のこと」

モノイド, 群, 環, 順序集合, ...

X を圏と見做し, 固定した圏 \mathcal{C} への関手 $X \rightarrow \mathcal{C}$ を考える.

記法 Set ... 集合と写像の圏

Cat ... 圏と関手の圏

K : 体, R : 環

$\text{Mod}(K)$... K -線型空間と K -線型写像の圏

$\text{Mod}(R)$... R -加群と R -加群の準同型写像の圏

籠とは何か? 抑も表現とは

表現とは? (モノイドの表現)

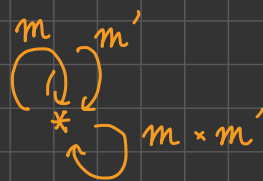
▶ モノイドを圏と見做す.

モノイド $M = \langle \underline{M}, \times, 1 \rangle$ と次の圏 $\mathcal{C}(M)$ を同一視する.

$$\text{ob } \mathcal{C}(M) = \{*\},$$

$$\text{mor } \mathcal{C}(M) = \underline{M},$$

$$m \circ m' := m \times m'$$



注意 対象が1つの圏はモノイドと見做される.

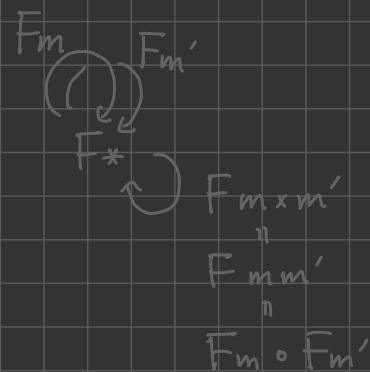
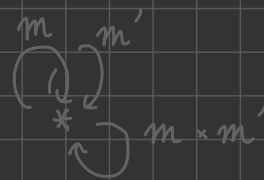
▶ 圏 $\mathcal{C}(M)$ から Set への関手を考える

関手 $F: \mathcal{C}(M) \rightarrow \text{Set}$ は,

- 対象 $*$ の写り先 $F_* := X$ と,
 - 射 $m (\in \underline{M})$ の写り先 $F_m: X \rightarrow X$ と
- の2のデータからなり, 次を満たす.

$$F_{m \times m'} = F_{mm'} = F_m \circ F_{m'}$$

$$F_{e_M} = F_{\text{id}_*} = \text{id}_{F_*} = \text{id}_X$$



\rightsquigarrow M -作用を備えた集合 $\langle X, \underset{\text{Set}}{M} \rightarrow \text{End}(X) \rangle$ を定める.

籠とは何か? 抑も表現とは

表現とは? (モノイドの表現)

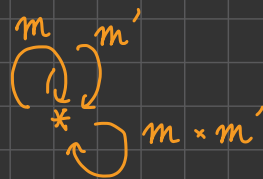
▶ モノイドを圏と見做す.

モノイド $M = \langle \underline{M}, \times, 1 \rangle$ と次の圏 $\mathcal{C}(M)$ を同一視する.

$$\text{ob } \mathcal{C}(M) = \{*\},$$

$$\text{mor } \mathcal{C}(M) = \underline{M},$$

$$m \circ m' := m \times m'$$



注意 対象が1つの圏はモノイドと見做される.

▶ 圏 $\mathcal{C}(M)$ から Set への関手を考える.

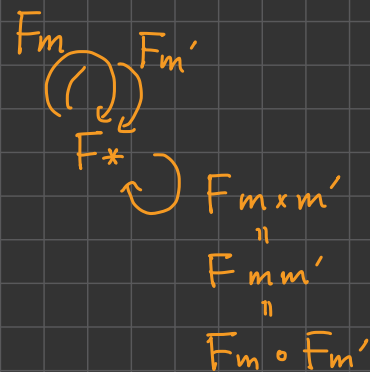
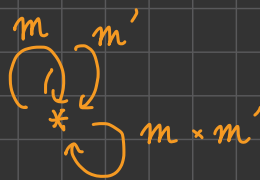
関手 $F: \mathcal{C}(M) \rightarrow \text{Set}$ は,

- 対象 $*$ の写り先 $F* =: X$ と,
 - 射 $m (\in \underline{M})$ の写り先 $F_m: X \rightarrow X$ と
- の2のデータからなり, 次を満たす.

$$F_{m \times m'} = F_{mm'} = F_m \circ F_{m'}$$

$$F_{e_M} = F_{\text{id}_*} = \text{id}_{F_*} = \text{id}_X$$

\rightsquigarrow M -作用を備えた集合 $\langle X, M \rightarrow \text{End}_{\text{Set}}(X) \rangle$ を定める.



籠とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？ (順序集合の表現)

▶ 順序集合を圏と見做す.

順序集合 $X = \langle X, \leq \rangle$ と次の圏 $\mathcal{C}(X)$ を同一視する.

$$\text{ob } \mathcal{C}(X) = X,$$

$$\text{Hom}_{\mathcal{C}(X)}(a, b) = \begin{cases} \{*\} & \text{if } a \leq b \\ \emptyset & \text{otherwise} \end{cases}$$

注意 各 Hom 集合の濃度が高々 1 元のとゞ, (前)順序集合と見做せる.

▶ 圏 $\mathcal{C}(X)$ から Set への関手を考える.

~> これは図式に他ならぬい.

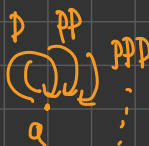
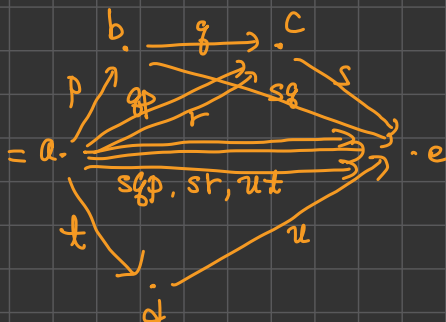
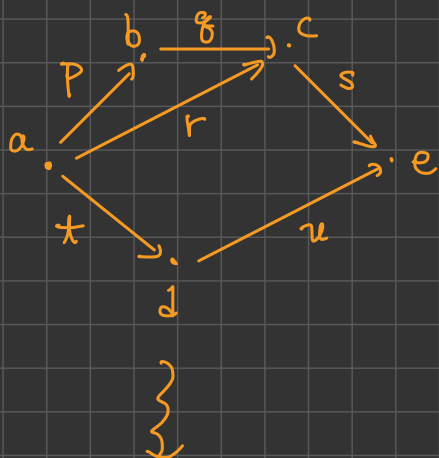
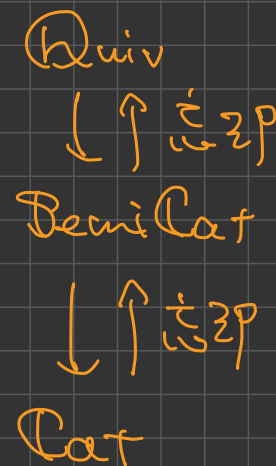
籠とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？ (籠の表現)

▶ 籠を圏と見做す. "その子孫"

$$\begin{cases} \text{ob}(\mathcal{C}(Q)) := \text{ob}(Q) \\ \text{Hom}_{\mathcal{C}(Q)}(x, y) = \{ x \text{ から } y \text{ への道全体} \} \end{cases}$$

とし、道の合成を積とする。



$$\text{Hom}_{\mathcal{C}(Q)}(a, a) = \{ e_a, p, pp, ppp, \dots \}$$

圏とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？ (圏の表現)

▶ 圏を圏と見做す. "その圏"

$$\begin{cases} \text{ob}(\mathcal{C}(Q)) = \text{ob}(Q) \\ \text{Hom}_{\mathcal{C}(Q)}(x, y) = \{ x \text{ から } y \text{ への道全体} \} \end{cases}$$

とし、道の合成を積とする。

注意 · 道の合成は変な関係式がたつ

圏から圏への自由な構成になる。

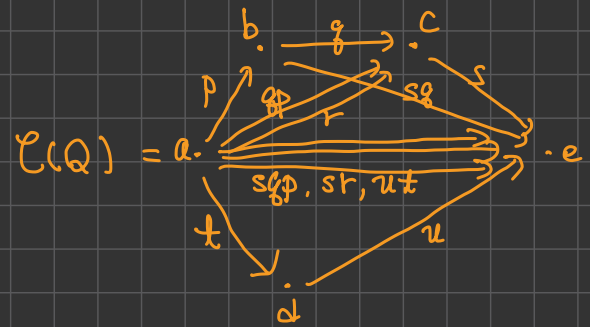
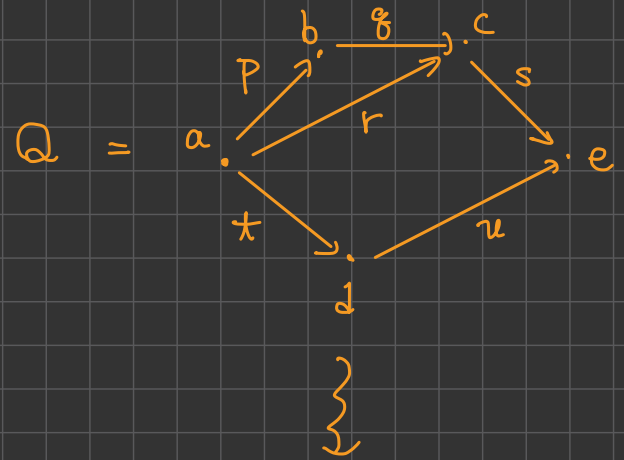
i.e. $Q \xrightarrow{\text{圏の射}} \mathcal{D}$ を任意に与えたと、 $Q \rightarrow \mathcal{D}$ が存在する。

\downarrow
 $\mathcal{C}(Q)$

\downarrow "圏の射"
(函手)
 $\mathcal{C}(Q)$

i.e. $\text{Hom}_{\text{Quiv}}(Q, \mathcal{D}) \cong \text{Hom}_{\text{Cat}}(\mathcal{C}(Q), \mathcal{D})$

i.e. $\mathcal{C}: \text{Quiv} \rightarrow \text{Cat}$ は忘却函手 $\text{Cat} \rightarrow \text{Quiv}$ の左随伴。



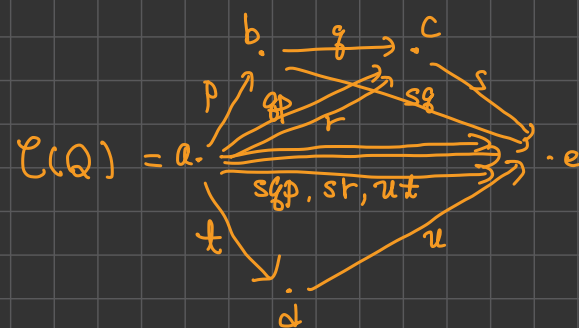
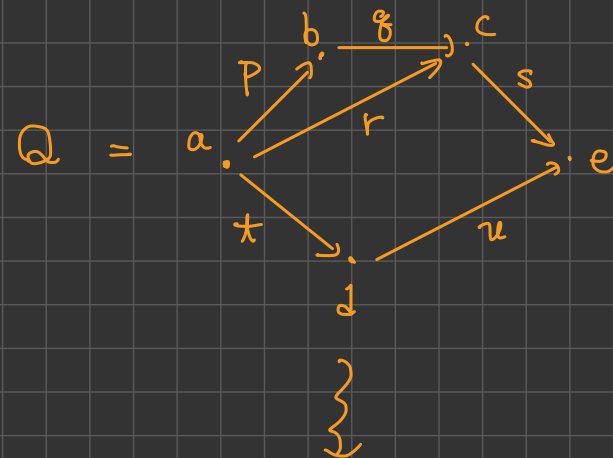
籠とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？ (籠の表現)

▶ 籠を圏と見做す. "その言葉"

$$\begin{cases} \text{ob}(\mathcal{C}(Q)) = \text{ob}(Q) \\ \text{Hom}_{\mathcal{C}(Q)}(x, y) = \{ x \text{ から } y \text{ への道全体} \} \end{cases}$$

とし、道の合成を積とする。



注意 · 道の合成は変な関係式がたつ

~~~~>  $\mathcal{C} : \text{Quiv} \rightarrow \text{Cat}$  は忘却函手  $\text{Cat} \rightarrow \text{Quiv}$  の左随伴  
· 道の長さという概念が整義的に定まる。

~~~~> ·  $p \in \text{mor}(\mathcal{C}(Q))$  のとき  $\text{len}(p)$  と書く

· 次が成立する: $\text{len}(pq) \leq \text{len}(p) + \text{len}(q)$

· 等号成立条件は, p と q とが合成可能 or

$\text{len}(p) = \text{len}(q) = 0$ である。

"非全域性"がこのようなやや \leq の原因

箭とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？ (箭の表現)

▶ 箭を圏と見做す. "その子"

$$\begin{cases} \text{ob}(\mathcal{C}(Q)) = \text{ob}(Q) \\ \text{Hom}_{\mathcal{C}(Q)}(x, y) = \{ x \text{ から } y \text{ への道全体} \} \end{cases}$$

とし、道の合成を積とする。

注意 . 道の合成は変な関係式がたつ

$\rightsquigarrow \mathcal{C} : \text{Quiv} \rightarrow \text{Cat}$ は忘却函手 $\text{Cat} \rightarrow \text{Quiv}$ の左随伴
・ 道の長さという概念が整義的に定まる。

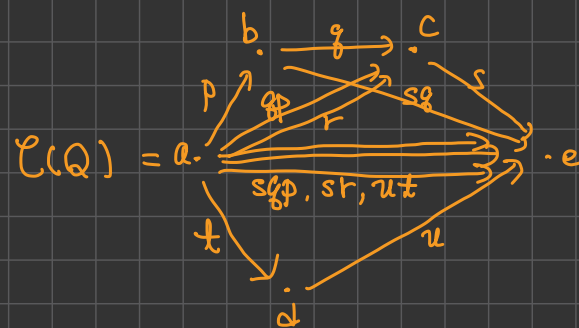
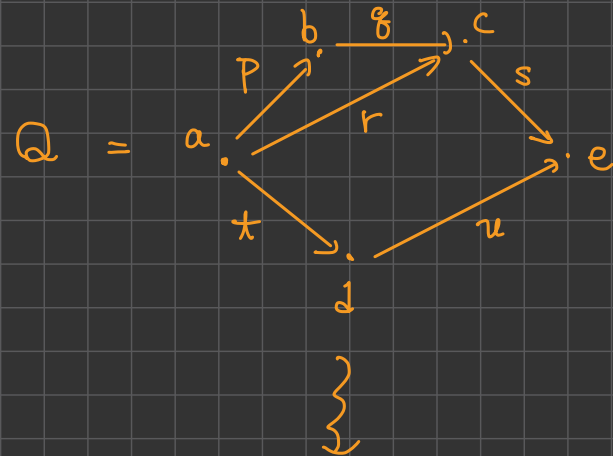
$\rightsquigarrow p \in \text{mor}(\mathcal{C}(Q))$ のとき $\text{len}(p)$ と書く
・ 恒等射 \Leftrightarrow 長さ 0.

▶ 圏 $\mathcal{C}(Q)$ から Set への関手を考える。

$\rightsquigarrow Q \hookrightarrow \mathcal{C}(Q)$ を合成すると Q からの箭の射が得られる。

$\rightsquigarrow Q$ から Set への箭の射と対応する。

$\rightsquigarrow \text{Set}$ に於ける可換とは限らな Q の図式と同じ。



圏とは何か？ 抑も表現とは

表現とは？ (圏の表現)

・ ここまでで、次が分かった

・ 圏の定義とその例

・ 圏から圏を自由に構成する方法

(圏 Q から道圏 $\mathcal{C}(Q) := \text{Path}(Q)$ を定めると)

・ 圏 Q の表現 \Leftrightarrow 自然に定まる圏 $\text{Path}(Q)$ からの函手

\Leftrightarrow 圏 Q から圏を圏に忘却した圏への圏の射

($\text{Hom}_{\text{Cat}}(\text{Path}(Q), \mathcal{C}) \cong \text{Hom}_{\text{Quiv}}(Q, \underline{\mathcal{C}})$)

・ $\text{Rep}(Q, \mathcal{C}) := \text{Func}(\text{Path}(Q), \mathcal{C})$ と書く

・ では何故 圏の表現を考へるのか？

A0. 有限次元多元環が具体的に分かる

A1. 組合せ論と多元環の表現論を繋ぐ！

A2. 多元環の表現だけでは分からない本質が見える！ etc...

・ 今回は加群論 (over 多元環) を具体的に見るために
道具としてこれを用いる, (A0).

圏とは何か？ 抑も表現とは

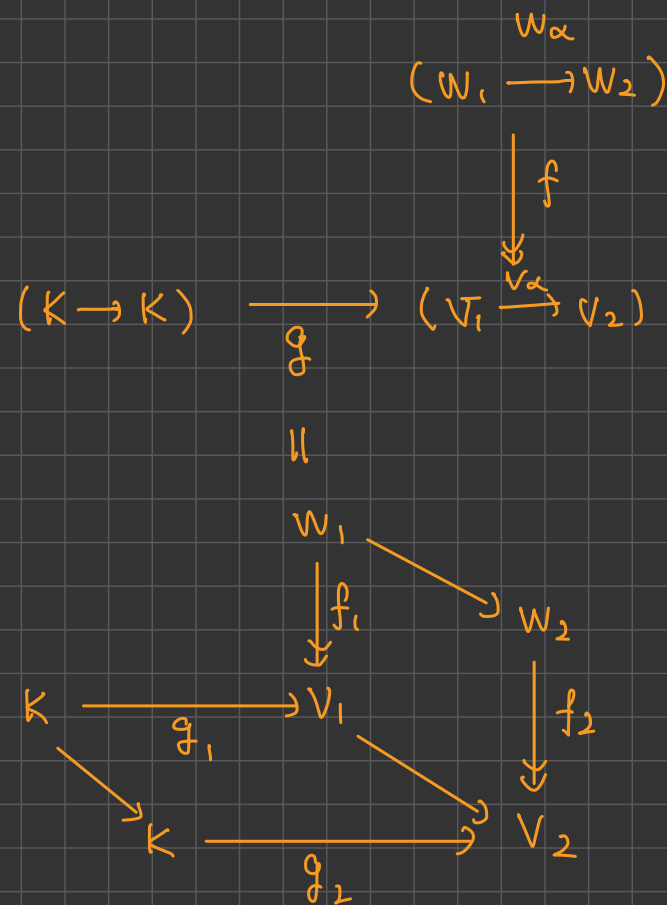
表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

• 圏 $A_2 = 1 \xrightarrow{\alpha} 2$ の $\text{Mod}(K)$ での表現を考えると:

例 0 $0 = 0 \xrightarrow{0} 0$ ← 零表現

例 1 $S(1) = K \longrightarrow 0$
 $S(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 単純表現

例 2 $P(1) = K \longrightarrow K$
 $P(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 射影表現



圏とは何か？ 抑も表現とは

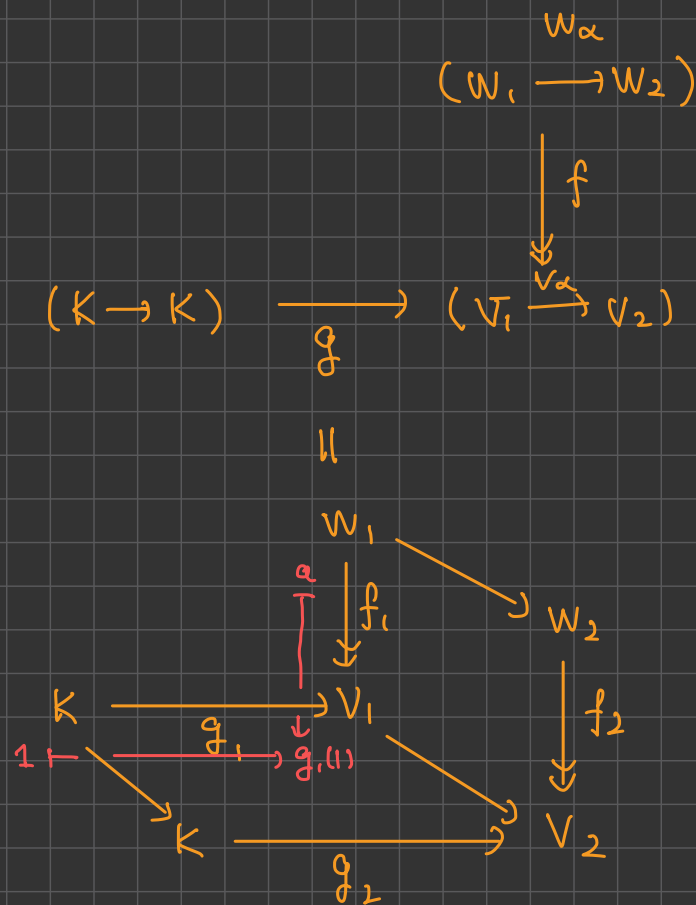
表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

• 圏 $A_2 = 1 \xrightarrow{\alpha} 2$ の $\text{Mod}(K)$ での表現を考えると:

例 0 $0 = 0 \xrightarrow{0} 0$ ← 零表現

例 1 $S(1) = K \longrightarrow 0$
 $S(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 単純表現

例 2 $P(1) = K \longrightarrow K$
 $P(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 射影表現



圏とは何か？ 抑も表現とは

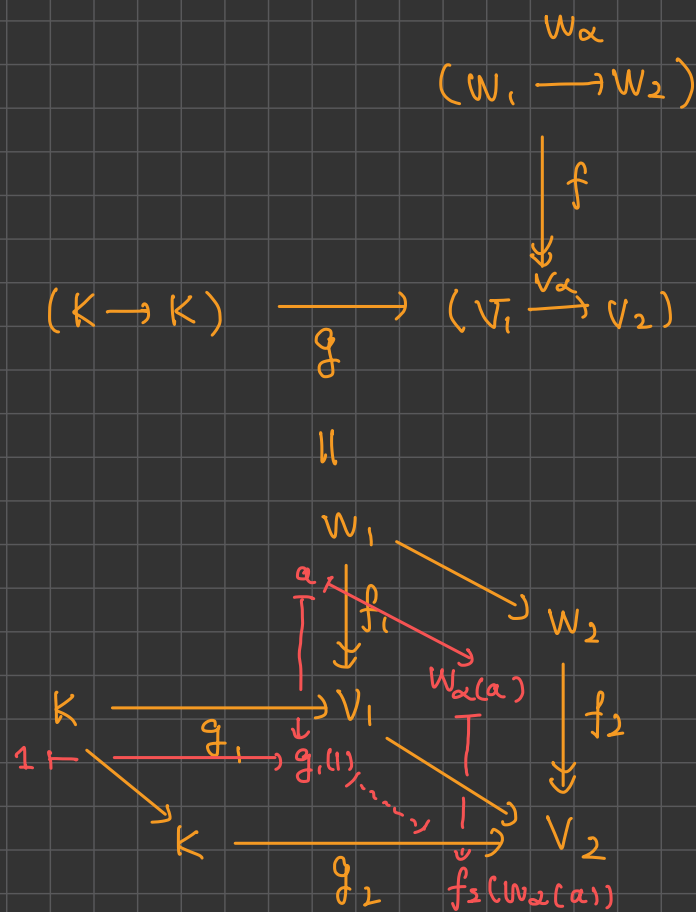
表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

• 圏 $A_2 = 1 \xrightarrow{\alpha} 2$ の $\text{Mod}(K)$ での表現を考えると:

例 0 $0 = 0 \xrightarrow{0} 0$ ← 零表現

例 1 $S(1) = K \longrightarrow 0$
 $S(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 単純表現

例 2 $P(1) = K \longrightarrow K$
 $P(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 射影表現



圏とは何か？ 抑も表現とは

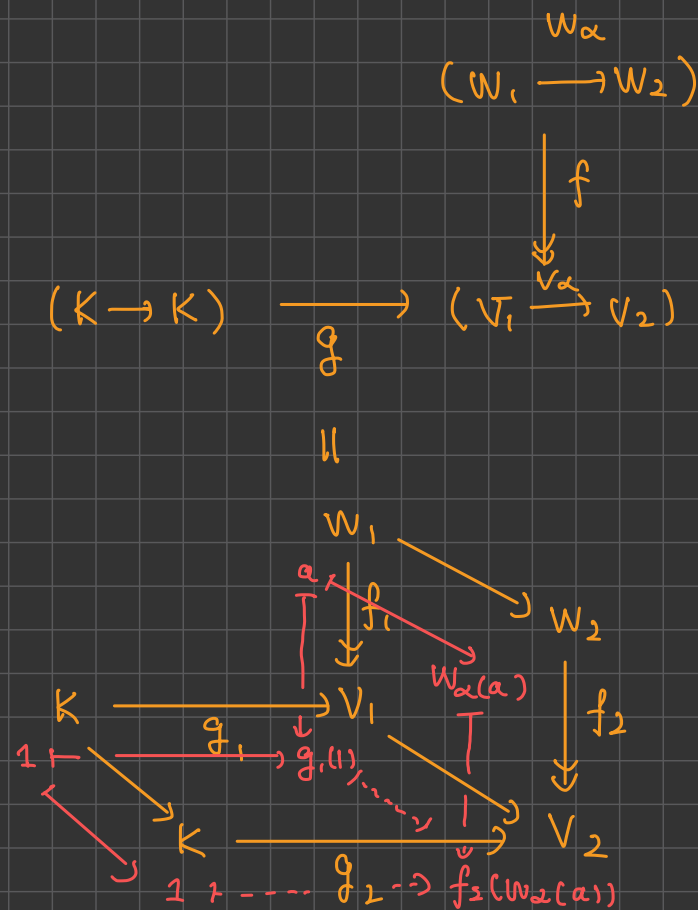
表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

• 圏 $A_2 = 1 \xrightarrow{\alpha} 2$ の $\text{Mod}(K)$ での表現を考えると:

例 0 $0 = 0 \xrightarrow{0} 0$ ← 零表現

例 1 $S(1) = K \longrightarrow 0$
 $S(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 単純表現

例 2 $P(1) = K \longrightarrow K$
 $P(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 射影表現



圏とは何か？ 抑も表現とは

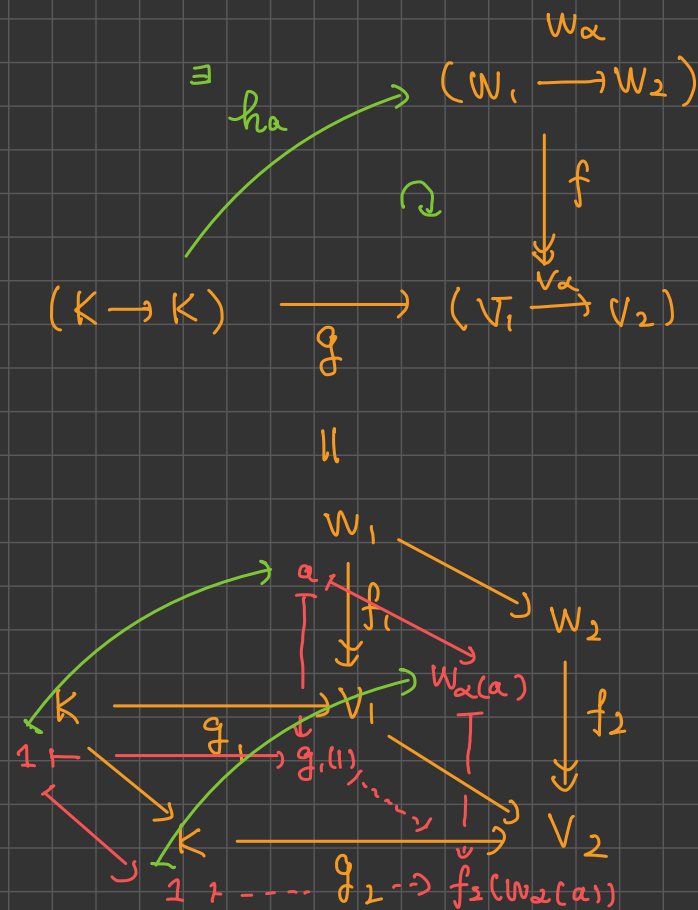
表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

• 圏 $A_2 = 1 \xrightarrow{\alpha} 2$ の $\text{Mod}(K)$ での表現を考えると:

例 0 $0 = 0 \xrightarrow{0} 0$ ← 零表現

例 1 $S(1) = K \longrightarrow 0$
 $S(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 単純表現

例 2 $P(1) = K \longrightarrow K$
 $P(2) = 0 \longrightarrow K$ ← 射影表現



圏とは何か？ 抑も表現とは

表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

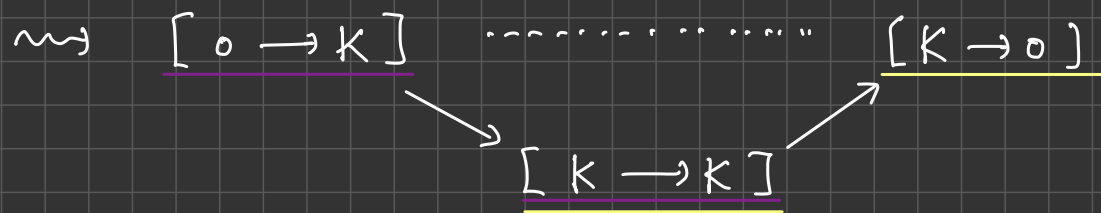
• 圏 $A_2 = 1 \xrightarrow{\omega} 2$ の $\text{Mod}(K)$ での表現を列挙:

例0 $0 = [0 \xrightarrow{0} 0]$ ← 零表現 (零対象)

例1 $S(1) = [K \rightarrow 0]$
 $S(2) = [0 \rightarrow K]$ ← 単純表現 (単純対象)

例2 $P(1) = [K \rightarrow K]$
 $P(2) = [0 \rightarrow K]$ ← 射影表現 (射影対象)

例3 $I(1) = [K \rightarrow 0]$
 $I(2) = [K \rightarrow K]$ ← 入射表現 (入射対象)

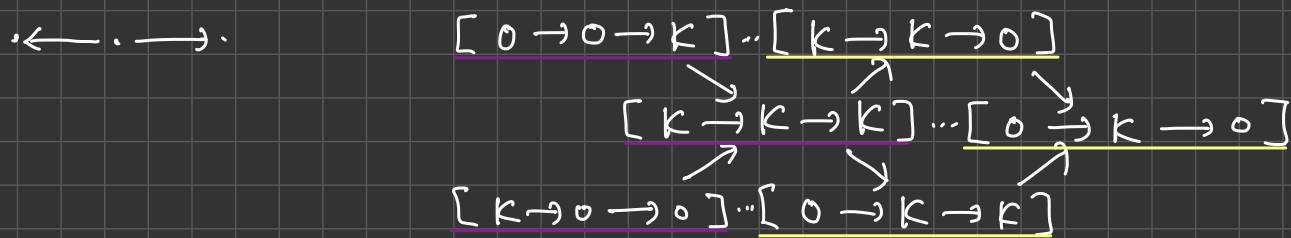
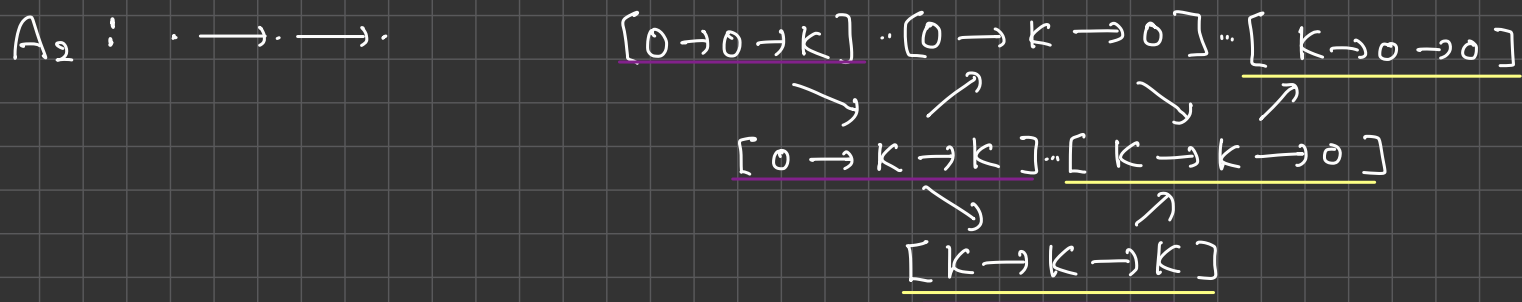
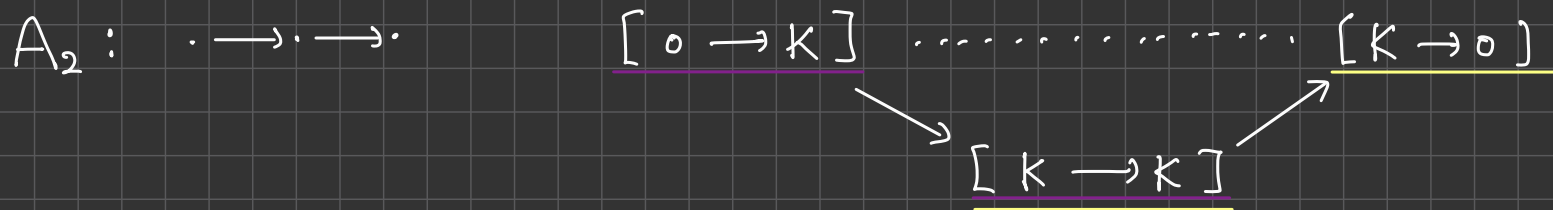


• 事実 $\text{rep}(A_2, \text{Mod}(K))$ に於ける直既約対象はこれだけで尽きてくる

(少なくとも今の私には加群論を回避する手法は/0か、747511)

籠とは何か？ 抑も表現とは

表現の例. (Mod(K)の場合)



・ 事実 $\text{rep}(A_2, \text{Mod}(K))$ に於ける直既約対象はこれだけで尽きてゐる

(少なくとも今の私には加群論を回避する手法は/0/か、747511)

籠とは何か? 抑も表現とは

表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

定義 圏 \mathcal{C} の対象 X が直既約であるとは、圏 \mathcal{C} に於て

$\varphi: Y \oplus Z \xrightarrow{\cong} X \Rightarrow \varphi \circ L_X$ か $\varphi \circ L_Y$ は同型射
が成立するとする u , 直既約対象全体を $\text{indec}(\mathcal{C})$ と書く.

定義 M, N を籠 \mathcal{Q} の表現とする. (i.e. $M, N: \mathcal{C}(\mathcal{Q}) \rightarrow \text{Mod}(K)$)

次で定平せぬ表現を $M \oplus N$ と書く.

- $a \in \text{ob } \mathcal{Q}$ に対し, $(M \oplus N)_a = M_a \oplus N_a$
- $p \in \text{mor } \mathcal{Q}$ に対し, $(M \oplus N)_p = M_p \oplus N_p$

↑
線型写像の行列表示をすれば,
 $(M \oplus N)_p = \begin{bmatrix} M_p & 0 \\ 0 & N_p \end{bmatrix}$ とおくと.

定義 籠 \mathcal{Q} の表現 M について,

$$M \cong X \oplus Y \Rightarrow M \cong X \text{ or } M \cong Y$$

が成立するとし, M を直既約表現と書く.

演習 $\text{indec}(\text{rep}(\mathcal{Q}, \text{Mod}(K))) = \{ \text{直既約表現} \}$ を確かめよ.

籠とは何か? 抑も表現とは

表現の例. ($\text{Mod}(K)$ の場合)

直既約対象に注目しているのは, 次の事実による:

事実 Q の有限次元表現は一意的な直既約分解をもつ

→ よって, 先の例では本質的に全ての有限次元表現が分かるといえる
(i.e. $\text{rep}(Q, \text{mod}(K))$ の対象)

→ 直既約表現の間の“基本的な射”を決定したくなると
(もし決定できれば $\text{rep}(Q, \text{mod}(K))$ の構造がよく分かる)

→ Auslander-Reiter理論.

注意 上の事実は, より精密に次のように述べられる:

$\text{rep}(Q, \text{mod}(K))$ は Krull-Schmidt 圏である.

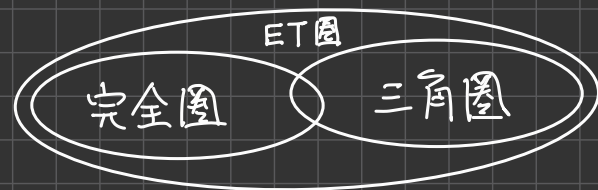
籠とは何か？ 抑も表現とは

?

$\text{rep}(Q, \text{mod}(K))$ の構造は分か、たけど、
い、 T 加群論はどこに出てくるんだ...?

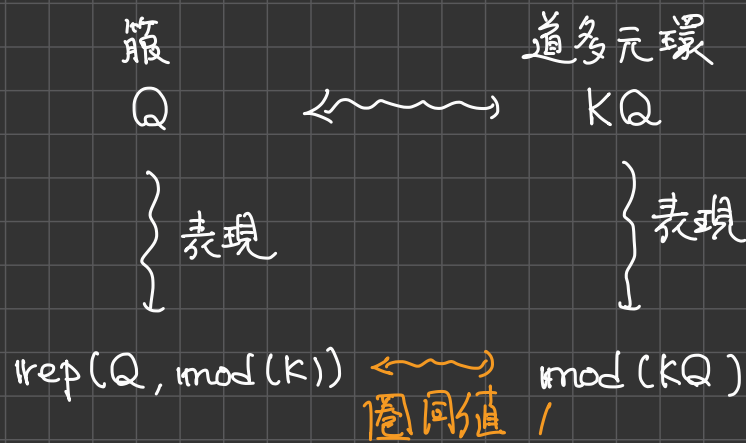
~~~~ 次節で明らかになる!

注意 ここまでには殆ど圏に對する言及しかしていない。  
このことは重要で、Auslander-Reiter 理論は  
完全圏や三角圏、更には ET 圏へ拡張される。



# 叢の表現と多元環の表現

(よくある) 概略



▶ 以上より, “道多元環として書かれるような多元環”の表現 (= 加群) は,  $Q$  の表現に帰着される.

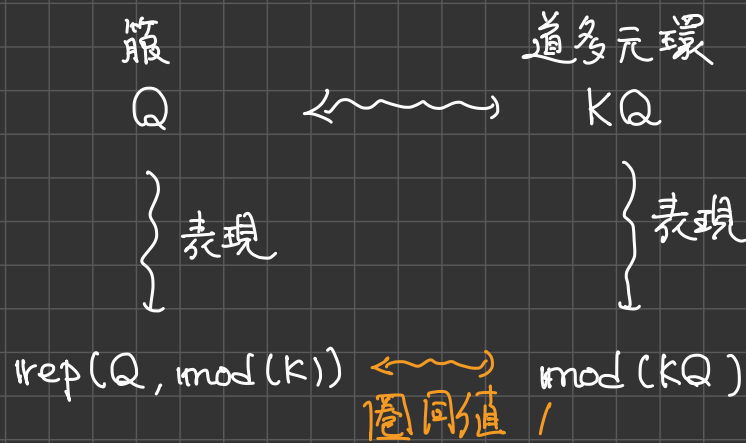
step 1 叢  $Q$  から 道多元環  $KQ$  を構成する.

step 2 叢  $Q$  の表現から  $KQ$  の表現を構成する.

step 3 道多元環  $KQ$  の表現から  $Q$  の表現を構成する.

# 叢の表現と多元環の表現

(よくある) 概略



▶ 以上より, "道多元環として書かれるような多元環" の表現 (= 加群) は,  $Q$  の表現に帰着される.

step 1 叢  $Q$  から 道多元環  $KQ$  を構成する.

step 2 叢  $Q$  の表現から  $KQ$  の表現を構成する.

step 3 道多元環  $KQ$  の表現から  $Q$  の表現を構成する.

# 箭の表現と多元環の表現

step 1 箭  $Q$  から 道多元環  $KQ$  を構成する.

▶ 道全体を基底とする  $K$ -線型空間  $KQ := K^{\oplus \text{Path}(Q)}$  について,  
道  $p$  に対応する  $KQ$  の元を  $e_p$  とすると,  $(e_p)_{p \in \text{Path}(Q)}$  は  $KQ$  の基底である.

▶ 道の合成を用いて  $K$ -双線型写像  $x$  を

$$x: KQ \times KQ \longrightarrow KQ$$

$$\langle e_p, e_q \rangle \longmapsto e_{pq} \quad \text{但 } p \text{ と } q \text{ とが合成不能の場合は } e_{pq} = 0 \text{ とする.}$$

と定義すると,  $\text{Path}(Q)$  に於て道の合成が結合的なので  $x$  も結合的

▶  $Q$  が有限箭なので,  $1_{KQ} := \sum \{ e_p \mid \overset{p \text{ は頂点}}{\text{len}(p)} = 0 \}$  が定数  $1$  であり,  $x$  に関する単位元である.

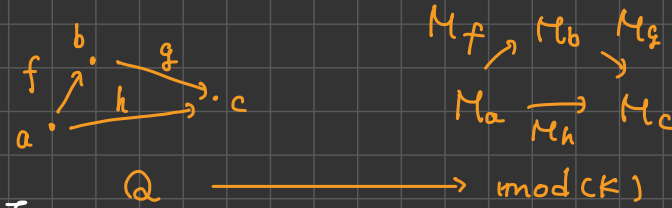
$$\left( \begin{array}{c} a \xrightarrow{f} b \xrightarrow{g} c \\ \quad \quad \quad \searrow h \rightarrow c \end{array} \right) \text{ とすると, } e_b(e_f + e_g + e_h)e_c = e_g + e_h \text{ とは, なる} \end{array}$$

$\rightsquigarrow \langle KQ, x, 1_{KQ} \rangle$  は  $K$ -多元環のデータを定める.



# 箭の表現と多元環の表現

step 2 箭  $Q$  の表現から  $KQ$  の表現を構成する.



▶ 箭  $Q$  の表現  $M: Q \rightarrow \text{mod}(K)$  を "1" に縛める" 即ち

$$F(M) := \bigoplus_{a \in Q_0} M_a$$

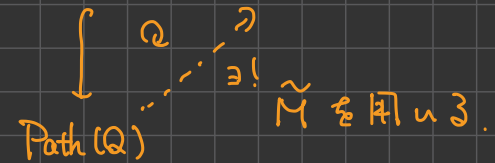
として,  $KQ$  の作用を道を用いて定める:

$$\begin{array}{ccc}
 KQ & \longrightarrow & (F(M) \longrightarrow F(M)) \\
 \downarrow & & \downarrow \\
 (i \xrightarrow{p} j) & \longmapsto & \sum_{a \in Q_0} k_a x_a \longmapsto \tilde{M}_p(k_i x_i)
 \end{array}$$

これは,  $KQ$  の表現と  $T_1, T_u$  (演習)

この構成に於ては

$$Q \xrightarrow{M} \text{mod}(K)$$



step 3 道多元環  $KQ$  の表現から  $Q$  の表現を構成する.

▶ 道多元環  $KQ$  の表現  $M: KQ \rightarrow \text{mod}(K)$  を任  $\lambda$  にとる.

$V := M(*)$  なる  $K$ -線型空間を " $Q$  の作用により分解可能" 即ち,

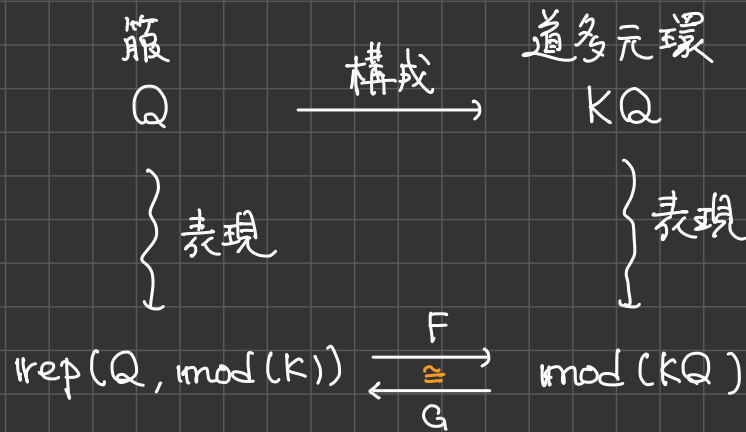
$$G(M)_0(i) := e_i V e_i$$

$$G(M)_1(i \xrightarrow{p} j) = e_i V e_j$$

とおくと,  $G(M): Q \rightarrow \text{mod}(K)$  が定まり, これは  $Q$  の表現と  $T_1, T_u$  (演習)

# 箭の表現と多元環の表現

(よくある) 概略 (再掲)



- ▶ 以上より, “道多元環として書かぬような多元環”の表現 (= 加群) は,  $Q$  の表現に帰着される.

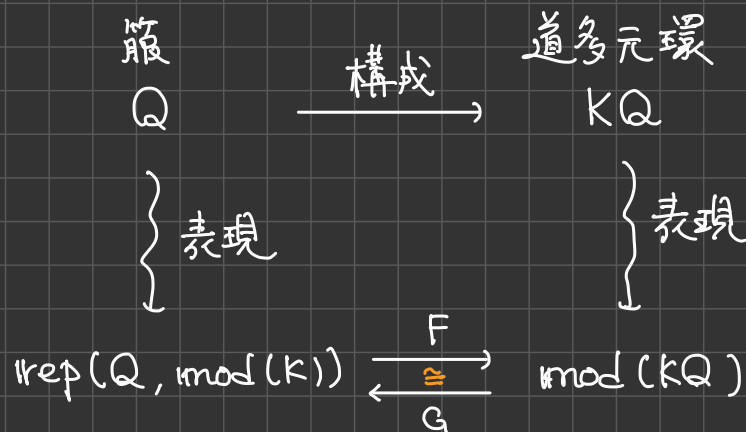
事実 (Gabriel)  $\text{indec}(\text{mod}(KQ))$  が本質的有限であることは,  $Q = A_n, D_n, E_{6,7,8}$  と同値.

[悲報]

- ▶ これは 遺伝多元環 のクズスしか調べていないことになる.
- ▶ そもそも上の図式も概念的には整理されていはいないように見える.

# 箭の表現と多元環の表現

(よくある) 概略 (再掲)



- ▶ 以上より, “道多元環として書かれるような多元環”の表現 (= 加群) は,  $Q$  の表現に帰着される.

事実 (Gabriel)  $\text{indec}(\text{mod}(KQ))$  が本質的有限であることは,  $Q = A_n, D_n, E_{6,7,8}$  と同値.

[ 悲報 ]

- ▶ これは 遺伝多元環 のクズしか調べていないことになる.
- ▶ そもそも上の図式も概念的には整理されていはいないように見える.

# 叢の表現と多元環の表現

[朗報] 有限次元多元環は、少し今までの話を modify すると射程に入る。

- ▶  $A$  を有限次元多元環とする。
- ▶  $A$  から次のように叢  $Q_A$  を構成できる:

$$\text{ob } Q_A := \{e_1, e_2, \dots, e_n\} \quad \text{但, } e_i \text{ 達は原始直交冪等元の代表系.}$$
$$\text{Hom}_{Q_A}(e_i, e_j) = \{x_{\alpha_1}, \dots, x_{\alpha_k}\} \quad \text{但, } x_{\alpha_i} \text{ 達は } e_i \text{ rad}(A)/\text{rad}^2(A) e_j \text{ の基底}$$

- ▶ 次のような全射が存在する:  $\varphi: KQ_A \longrightarrow A$   
$$\begin{array}{ccc} \downarrow & & \downarrow \\ x_{\alpha_i} & \longmapsto & x_{\alpha_i} \end{array}$$

☺ 全射性を  $K$ : 代数体の場合に軽く見る. Wedderburn-Malcev の定理より

$$0 \rightarrow \text{rad}(A) \rightarrow A \rightarrow A/\text{rad}(A) \rightarrow 0 \quad (\text{ex})$$

は分裂する. Artin 性より  $\text{rad}(A)$  は冪零で、よって

$$\text{rad}(A) = \langle x_{\alpha_i} \text{ 達で生成} \rangle \quad \leftarrow \dots \text{ここは冪零性を用いる}$$

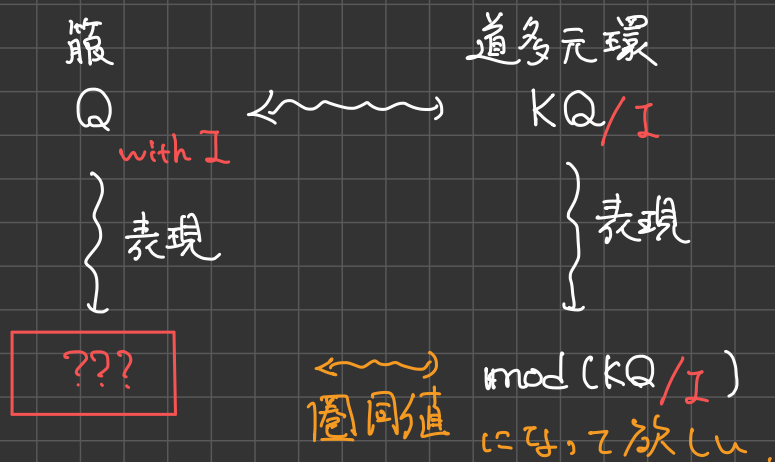
$$A/\text{rad}(A) = \langle e_i \text{ 達で生成} \rangle$$

かゝるので ok.

- ▶  $\text{Ker } \varphi$  は許容的イデアルである,  
(生成系を適のみでとるとし、長さは 2 以上かつ有限にできると)

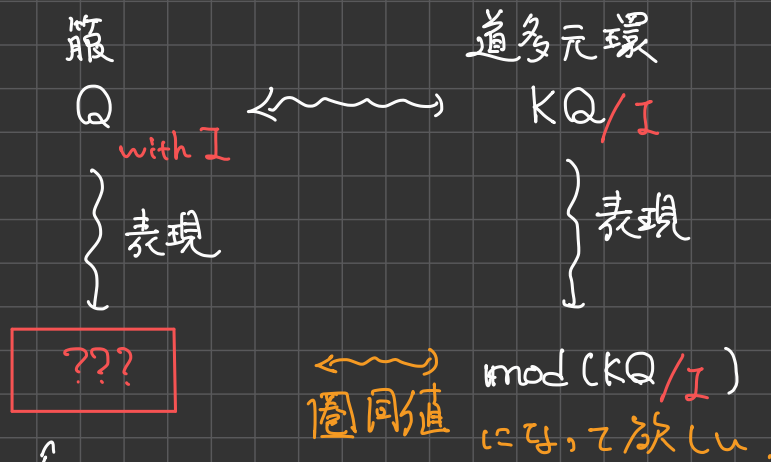
# 叢の表現と多元環の表現

(よくある) 概略 +  $\alpha$



# 籠の表現と多元環の表現

(よくある) 概略 +  $\alpha$



ここは " $I$  (path の集まり) に対応する

線型写像  $\alpha$  が 0 になる, するもの" に限ると上手く  $\alpha$  !

定義  $I$  を path の集合とする.  $Q$  の表現  $M$  が  $I$  で束縛されるとは,

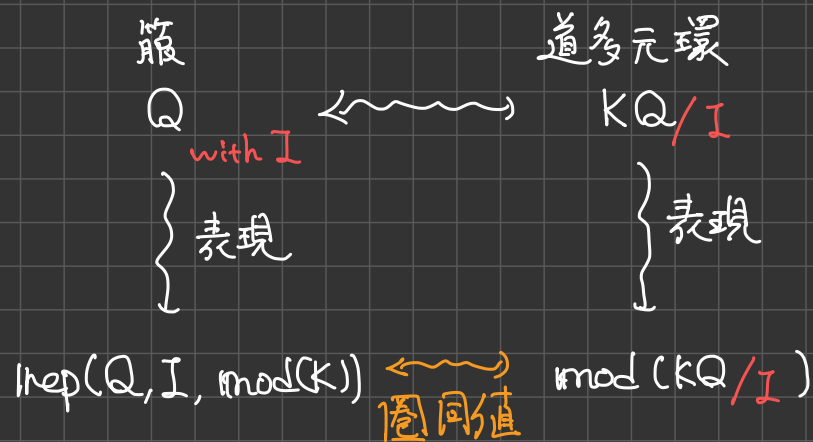
$$p \in I \implies M_p = 0$$

をみたすことをいう. このような表現の存在を 充満部分圏 を

$\text{rep}(Q, I, \text{mod}(K))$  と書く.

# 叢の表現と多元環の表現

(よくある) 概略 +  $\alpha$

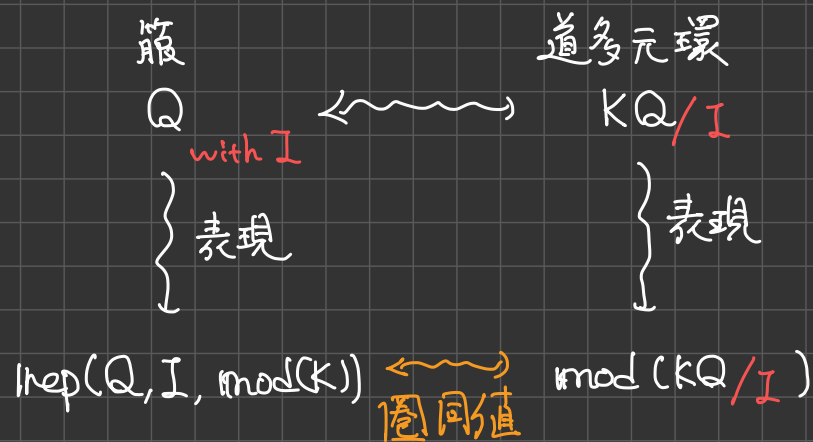


[悲報]

- ▶ ~~これは 遺伝多元環 のクラスしか調べていないことになる。~~
- ▶ そもそも上の図式も概念的には整理されていらないように見える。  
→ なるべくこの改善を試みる!

# 叢の表現と多元環の表現

(よくある) 概略 +  $\alpha$



[悲報]

- ▶ ~~これは 遺伝多元環 のクセスしか調べていないことになる。~~
- ▶ そもそも上の図式も概念的には整理されていはいないように見える。  
.....なるべくこの改善を試みる!





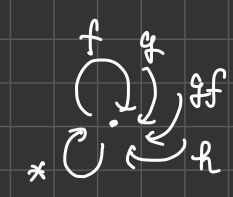
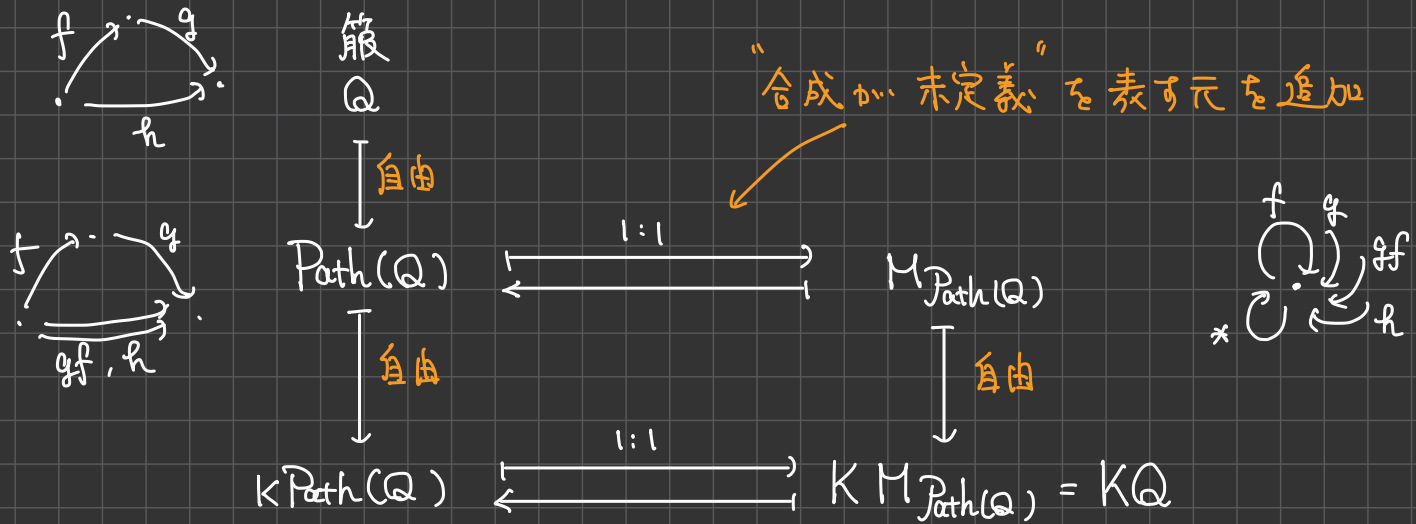
どうしてもっと前もってちゃんと  
準備しようと  
思わなかったんだろう・・・

講演の準備期間は短かって  
わかってたのに・・・

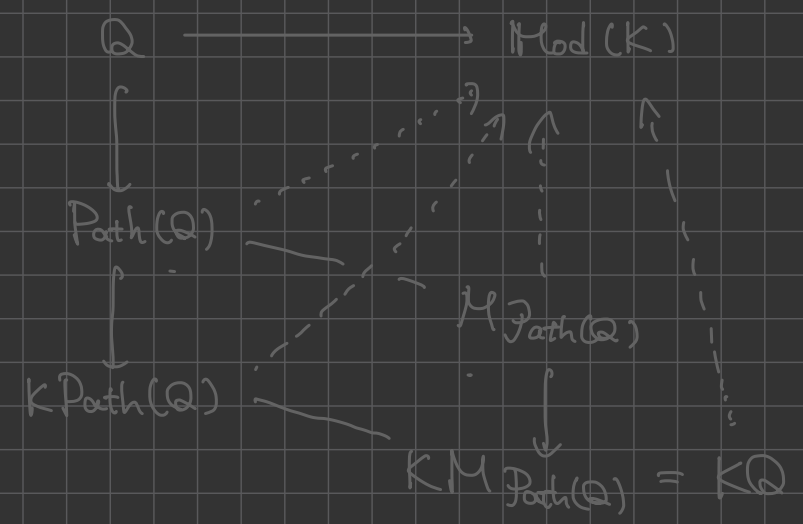
END

提供：N.Yさん

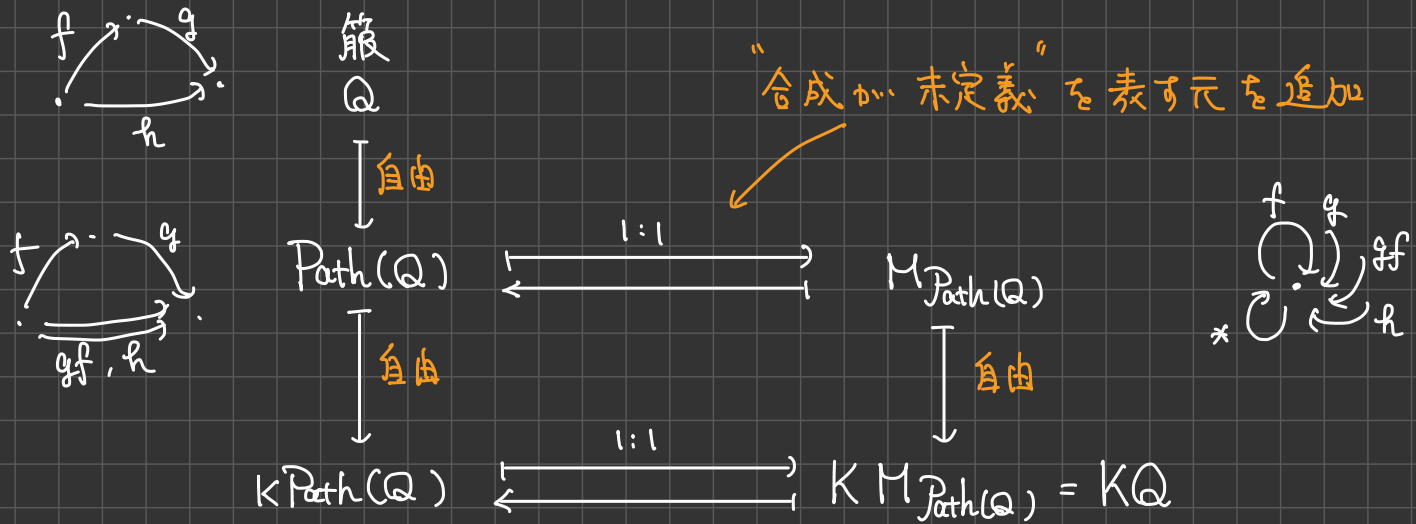
# 箭の表現と多元環の表現



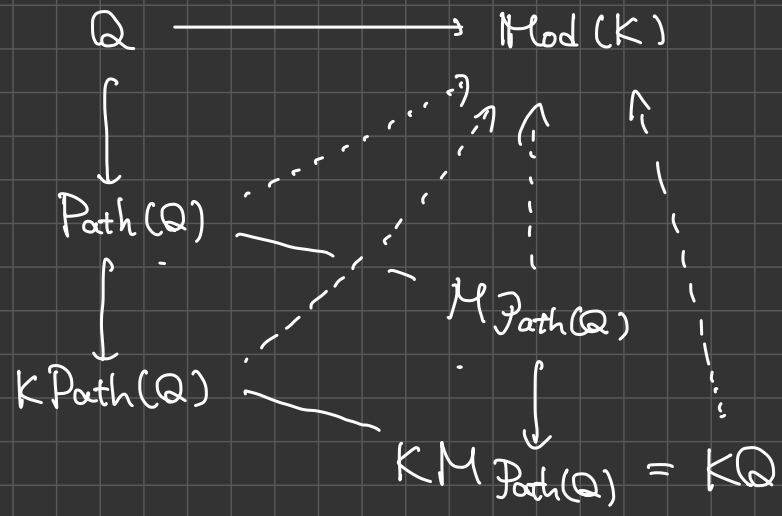
|    | f | g  | gf | h |
|----|---|----|----|---|
| f  | * | gf | *  | * |
| g  | * | *  | *  | * |
| gf | * | *  | *  | * |
| h  | * | *  | *  | * |



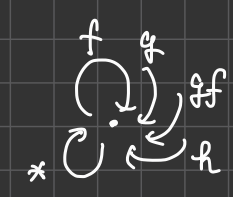
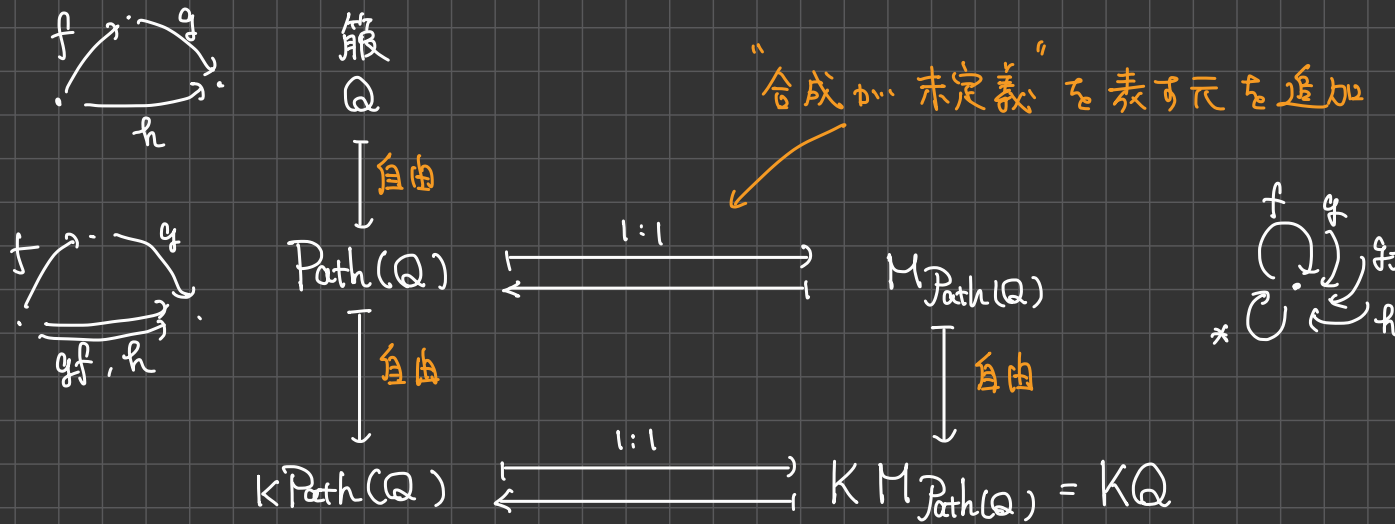
# 箭の表現と多元環の表現



|      | $f$ | $g$  | $gf$ | $h$ |
|------|-----|------|------|-----|
| $f$  | *   | $gf$ | *    | *   |
| $g$  | *   | *    | *    | *   |
| $gf$ | *   | *    | *    | *   |
| $h$  | *   | *    | *    | *   |

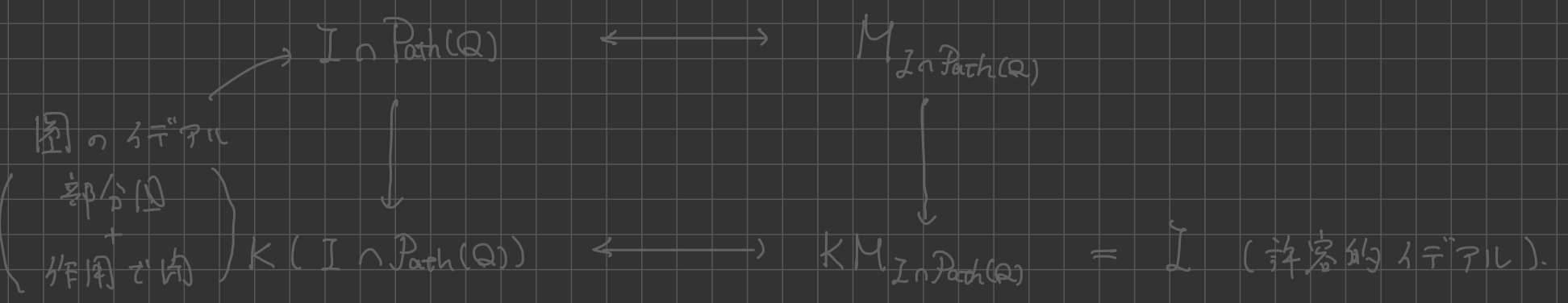


# 箭の表現と多元環の表現

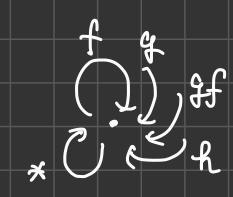
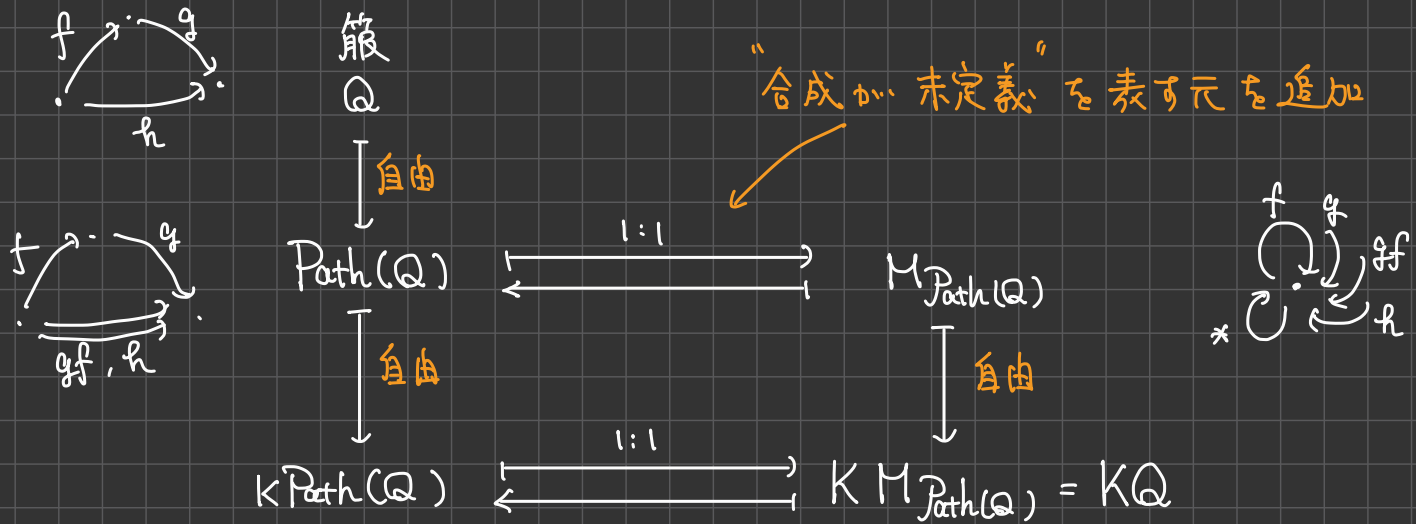


|    | f | g  | gf | h |
|----|---|----|----|---|
| f  | * | gf | *  | * |
| g  | * | *  | *  | * |
| gf | * | *  | *  | * |
| h  | * | *  | *  | * |

$\phi = I \cap \text{mor}(Q)$  i.e. 箭の情報を忘れてu?u.

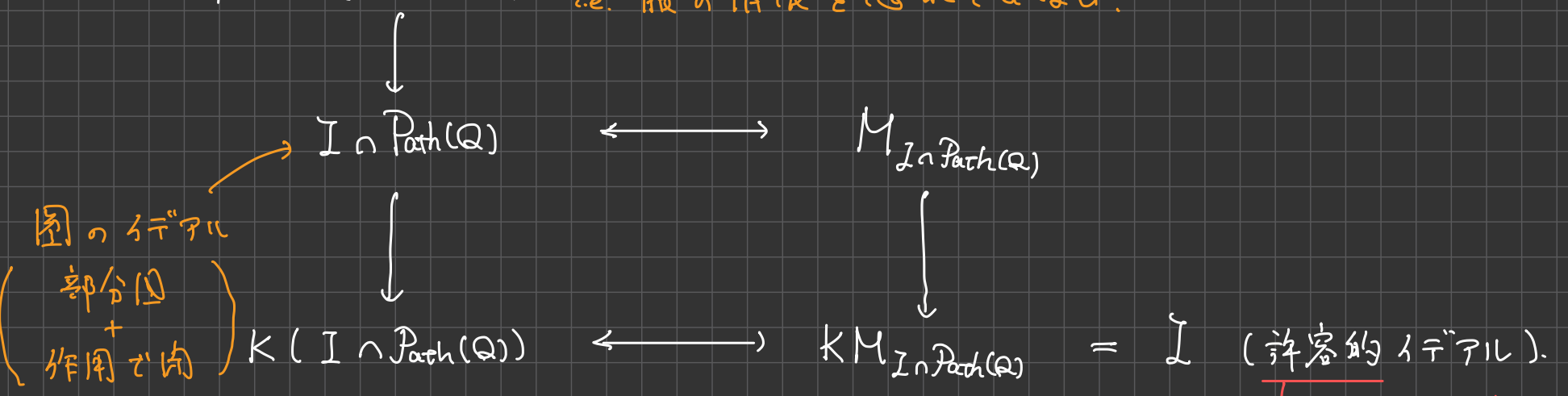


# 箭の表現と多元環の表現



|    | f | g  | gf | h |
|----|---|----|----|---|
| f  | * | gf | *  | * |
| g  | * | *  | *  | * |
| gf | * | *  | *  | * |
| h  | * | *  | *  | * |

$\phi = I \cap \text{mor}(Q)$  i.e. 箭の情報を忘れたら.



図のイデアル  
(部分図 + 作用で肉)

箭の info. を忘れたら  
有限次元.

# Auslander-Reiter 理論 (3.12)

$$\text{Fen}(\text{mod}(A), \text{mod}(K)) = \text{mod}(\text{mod}(A))$$



$$\text{Fen}(A, \text{mod}(K)) = \text{mod}(A)$$



A

$$0 \leftarrow S \leftarrow \text{Hom}(-, M) \leftarrow \text{Hom}(-, N) \leftarrow \text{Hom}(-, L) \leftarrow 0$$

# Auslander-Reiter 理論 (第 14 卷)

$$\text{Fen}(\text{mod}(A)^{\text{op}}, \text{mod}(k)) = \text{mod}(A)$$



$$\text{Fen}(A^{\text{op}}, \text{mod}(k)) = \text{mod}(A)$$



A

$$0 \leftarrow S \leftarrow \text{Hom}(-, M) \leftarrow \text{Hom}(-, N) \leftarrow \text{Hom}(-, L) \leftarrow 0$$



$$0 \rightarrow M \rightarrow N \rightarrow L \rightarrow 0 \quad (\text{almost split seq.})$$